

ローマ人への手紙16章「主にある兄弟姉妹」

1A 同労者について 1-16

1B 推薦 1-2

2B あいさつ 3-16

2A 勧めにおいて 17-26

1B 分裂を起こす者への警戒 17-20

2B 宣教チーム 21-24

3B 堅く立たせることができる方 25-27

ローマ人への手紙 16 章を開いてください。とうとう最後の章になりました。ここでのメッセージ題は、「主にある兄弟姉妹」です。

私たちは今まで、信仰による義についての教えと、キリストとの歩みについて学んできました。けれども、その手紙を受け取って読む人々の姿、またパウロとともにいる周りの人々についてのことは知ることができませんでした。けれども、この章には、数多くの具体名が記されています。このパウロの手紙を、どのような人たちが読んでいたのか、なぜパウロがこのような内容の手紙を書いたのか、それをこの章から垣間見ることができます。

1A あいさつの中に 1-16

パウロは、15 章の終わりで、「どうか、平和の神が、あなたがたすべてとともにいてくださいますように。」と言って、この手紙を終えようとしています。けれども、彼は言い残したことを思い出して、また話し始めます。そして再び祝福をして終えようとしますが、また言い残したことを思い出して、付け加えます。この繰り返しによって 16 章が出来あがりますが、私たちも、話が尽きない友といっしょにいるときに、「さようなら」とあいさつしても、玄関先で再び話しこんでしまいますね。パウロも、ローマにいる聖徒たちに対して、親しみを持ち、自分のことを、心を開いて分かち合っているのです。

1B 推薦 1-2

1 ケクレヤにある教会の執事で、私たちの姉妹であるフィベを、あなたがたに推薦します。2 どうぞ、聖徒にふさわしいかたで、主にあつてこの人を歓迎し、あなたがたの助けを必要とすることは、どんなことでも助けてあげてください。この人は、多くの人を助け、また私自身をも助けてくれた人です。

パウロがフィベという女性を、ローマにいる聖徒たちに推薦しています。彼女がこの手紙を受け取って、ローマにある教会に送り届けることになるからです。ケクレヤは、コリントの町に隣接す

る港町です。彼女は教会において執事をしながら、なおかつ商売をしていたのかもしれませんが。ローマに行く仕事の用事があったので、それでこの手紙を彼女に託したのだと思われます。ローマにいる人々にとっては、フィベは初めての人なので、パウロは彼女を推薦して、彼女が受け入れられるように配慮したのです。パウロは、「聖徒にふさわしいかたで、主にあってこの人を歓迎してください。」と言いました。

私たちは、今年の合同修養会で教会家族について学びました。私たちは、家族というつながりがある存在です。パウロがフィベを紹介する時に、「姉妹」なのですと教えました。そのように、他人行儀にしてはいけないという意味合いがあります。さらに、「執事」すなわち仕える人なのですよ、と言っています。彼女は、多くの人を助けた、パウロも助けたということは、福音宣教の働きのためにそうしました。そういった奉仕をしているのですから、あなた方も彼女を助けてくださいということです。似たようなパウロの文がピリピ書にもあります。「ピリピ 2:29-30 ですから、喜びにあふれて、主にあって、彼(エパフロデト)を迎えてください。また、彼のような人々には尊敬を払いなさい。なぜなら、彼は、キリストの仕事のために、いのちの危険を冒して死ぬばかりになったからです。彼は私に対して、あなたがたが私に仕えることのできなかつた分を果たそうとしたのです。」このような相互の関係性、互いに仕えるということが必要であります。

ところで、このフィベは女性であるのにも関わらず、重要な働きを行なっています。この後も、多くの女性の名前が現われますが、私はパウロが、女性に対して、男性と同じように深い尊敬を払っていることを見ることができます。教会の中では、女性は男性と同じように奉仕することができます。唯一、女性が教会の中で出来ないのは、第一テモテ2章 12 節によると、男を教えて支配することです。けれども、祈ることも、預言することも、勧めをすることも、奉仕をすることも、みなすることができます。教会は、キリストにあって、男と女が一つになったところです。

2B 同労者 3-16

3 キリスト・イエスにあって私の同労者であるプリスカとアクラによろしく伝えてください。

ここから、ローマにいる人々へのあいさつになります。パウロは一度もローマに行ったことがありませんが、彼は強い結びつきのようなものがあつたことを、手紙で既に伺うことができました。なぜなら、自分の知っている人がたくさんいたからです。ローマは世界の中心地ですから、他の地域で主の御言葉を信じた人々がローマに行って、福音を宣べ伝えていました。その一人が、一組がプリスカとアクラです。

プリスカとアクラは、使徒行伝と書簡において6回も登場する夫婦です。プリスカはプリスキラとも呼ばれる女性で、その夫がアクラです。二人はいつも一つのチームになって動いていたようですが、プリスカがいろいろ前に出て奉仕をしていたのだと思われます。彼らはもともとローマに住ん

でいました。二人ともユダヤ人ですが、ローマのクラウデオ帝が反ユダヤ主義の政策を取り、ユダヤ人たちをローマから追放してしまいました。そこで二人はコリントに移り住んでいましたが、そこでパウロは、二人に出会います。パウロは天幕作りの仕事を持っていますが彼らも同業者だったので、共に働くようになりました。(使徒 18:1-3,24-26)

彼らはエペソに行きました。プリスキラとアクラはそこに留まりましたが、パウロはエルサレムに向かい、それからアンテオケに行って、そして再びエペソに行きました。パウロがエペソに戻ってくる前に、エペソにはアポロという雄弁家がありました。彼はイエスについて力強く論証していましたが、聖霊のバプテスマについて知りませんでした。そこでプリスカとアクラは彼に、もっと正確に神の道を教えました。後でパウロが来て、エペソにいる信者のために祈り、信者たちは聖霊のバプテスマを受けました。その間に、ローマにおけるユダヤ人追放勅令は解けたのでしょう。プリスキラとアクラはローマに戻ったようです。

こうした二人をパウロは、「同労者」と呼んでいます。主にあってともに労した仲間です。この労苦の中でパウロと二人の間には兄弟愛が生まれました。パウロは、他にも主にある同労者、主にあって労苦している人々の名前を挙げて、あいさつをしています。箴言には、「友はどんなときにも愛するものだ。兄弟は苦しみを分け合うために生まれる。(17:17)」とあります。福音宣教のためにも共に労することによって生じてくる愛があるのです。

4 この人たちは、自分のいのちの危険を冒して私のいのちを守ってくれたのです。この人たちには、私だけでなく、異邦人のすべての教会も感謝しています。5a またその家の教会によろしく伝えてください。

プリスキラとアクラは、パウロのいのちを守るために、自分のいのちの危険をも冒すようなことさえしたほどの、信仰の勇敢さを持っていました。パウロを主にあって愛していました。使徒ヨハネは、「ことばや口先だけで愛することをせず、行ないと真実をもって愛そうではありませんか。(1ヨハネ 3:18)」と言いました。行ないのともなう真実な愛です。そして二人はユダヤ人でありましたが、彼らは異邦人に対しても主の愛を注いでいたので、「異邦人のすべての教会も感謝して」いるとあります。

そして、アクラとプリスキラは、家を開放して礼拝していました。彼らはいろいろなところに移り住みましたが、それぞれの場所で自分の家を開放しました。そこで聖書の学びを行ない、礼拝を守り、それで教会が出来あがりました。それで「家の教会」があります。キリスト教会には、「家の教会運動」というものがあり、従来の教会堂ではなく、聖書にあるように家の中で行なおうという運動があります。私は、これにはあまり賛同できません。それは背景が違うからです。ローマ帝国の中で、キリスト者が集まるにしても、どこも貸してくれません。唯一、信者の家だけが許されたところでした。

ですから、中国のキリスト教会がそれに近いでしょう。彼らは自ら望んで家を教会の場として選んだのではないのです。ですから、家の教会という形態が重要なのではなく、そのような制約がある中でも、主の教会が生き生きと活動していたということが重要です。

パウロは続けて、他の人々へあいさつします。

5b 私の愛するエパネトによろしく。この人はアジアでキリストを信じた最初の人です。

パウロは初めに小アジアにおける宣教を始めましたが、エパネトはその初穂です。パウロにとっては、とても意味深い人になっているのでしょう。エパネトを「私の愛する人」と呼んでいます。

6 あなたがたのために非常に労苦したマリヤによろしく。

この労苦は、「疲弊するまで労働する」という意味です。このマリヤは、へとへとになるまで、ローマの聖徒のために労したようです。私たちはキリストの愛に駆り立てられるとき、自分を省みずに労して働くことがあります。無理をしないことは大切ですが、無理をしてまで人を助けようとする愛を、主は私たちに与えてくださるのです。

7 私の同国人で私といっしょに投獄されたことのある、アンドロニコとユニアスにもよろしく。この人々は使徒たちの間によく知られている人々で、また私より先にキリストにある者となったのです。

アンドロニコとユニアスは、パウロといっしょに投獄された人で、同じくユダヤ人です。そして、この二人はどちらも女性の名前です。「使徒たちの間によく知られている」と書いてありますが、これは正確には、「よく知られた使徒たちの一人」と訳したほうが良いでしょう。彼女たちは使徒たちだったのです。もちろん十二使徒のうちの一ではありません。ギリシヤ語で聖書を読むと、「遣わされる」という言葉は、「使徒とされた」と訳することができるのです。例えばバルナバもそういう意味で使徒でした。ですから、女性たちも、使徒の働きをすることができるほど、女性は教会で用いられていたのです。そして、彼女たちはエルサレムにおいてキリスト者となったのでしょう。「私より先にキリストにある者となったのです。」とパウロは言っています。

8 主にあって私の愛するアムプリアトによろしく。9 キリストにあって私たちの同労者であるウルバノと、私の愛するスタキストによろしく。

主にあって愛する、という言葉が繰り返されています。親愛を込めた言葉です。そしてもちろん、自分ではなく、主にあってパウロは人々を愛していました。私たちの間に、そのような関係が築け

ているでしょうか。

10a キリストにあつて練達したアペレによろしく。

練達したとは、さまざまな試験を通して、合格の証印をおされることを意味します。つまり、アペレは、本当のキリスト者であると太鼓判を押されているわけです。パウロの手紙には、最初はキリスト者として、また同労者として働いていた者たちが、後になって離れていく人々の名前も出てきます。試練や、自分にとって都合の悪いことが起こると離れてしまう人たちがいるなかで、このアペレは、真の信仰を持っていました。

10b アリストブロの家の人たちによろしく。11 私の同国人ヘロデオンによろしく。ナルキソの家の主にある人たちによろしく。

これらは、再び家の教会の人たちです。そこで牧会する働き人もいましたが、家を開放し、管理する人々にも大きな務めがありました。

12 主にあつて労している、ツルパナとツルポサによろしく。主にあつて非常に労苦した愛するペルスシスによろしく。

再び主にあつて労している、という言葉が続いています。「非常に労苦した愛する」ともあります。同労者として、共に労苦するところにある愛情とその結びつきがここに強調されています。

13 主にあつて選ばれた人ルポスによろしく。また彼と私との母によろしく。

ルポスの母は、もちろんパウロの肉親ではありません。けれども、靈的に母と呼ぶことができたほどの関係があったようです。

14 アスクリト、フレゴン、ヘルメス、パトロバ、ヘルマスおよびその人たちといっしょにいる兄弟たちによろしく。15 フィロロゴとユリヤ、ネレオとその姉妹、オルンパおよびその人たちといっしょにいるすべての聖徒たちによろしく。

再び神の家として、兄弟と姉妹の関係が強調されています。そしてもう一つ、「聖徒」という言葉が使われています。私たち日本の教会では、信徒や信者がよく使われますが、例えば韓国ではそのまま「聖徒」が使われています。これは、そのまま「聖め別たれた者」ということです。世から、罪から聖め別たれ、そして主の所有となったということです。

16 あなたがたは聖なる口づけをもって互いのあいさつをかわしなさい。キリストの教会はみな、あなたがたによろしくと言っています。

口づけは、もちろん、当時の社会においてあいさつとして行なっていました。聖なる口づけとは、主にあってあいさつをする、ということであります。これは、ただ「おはようございます」と言うことではなく、今見てきたように、主にあって抱いている兄弟愛に裏付けされたあいさつです。こうした兄弟愛を抱くには、私たちが単に、聖書を学ぶために教会に来るだけでは身につけることはできません。主にあって共に労していることが必要なのです。強いられてでもなく、いやいやながらでもなく、キリストの愛に満たされて、それがあふれ出て来る結果、ともに労します。そうした進んでともに労し、そしてその中に、互いのあいさつを交わすことができるのです。

2A 勧めの中に 17-27

そしてパウロは 17 節以降で、このような美しい交わりを破壊する要素について、警戒するように勧めています。

1B 警戒 17-20

17 兄弟たち。私はあなたがたに願います。あなたがたの学んだ教えにそむいて、分裂とつまずきを引き起こす人たちを警戒してください。彼らから遠ざかりなさい。

分裂とつまずきを引き起こす人たちは、彼らは、自分たちが学んだ教え、つまり使徒たちの教えにそむいている人たちです。ここで、「教え」という言葉が単数になっているのに対して、分裂と躓きは複数形になっているとのことです。つまり、私たちが共に使徒たちの教え、すなわち新約聖書の教えを聞いて一つになり、そこに愛と労苦における結びつきがあるのに、そうではない異質なものを持って来て、私たちを分裂させて、躓きを置こうとします。

パウロは、第一に「警戒しなさい」と言いました。しっかりと見張っていなさい、ということです。第二に、「彼らから遠ざかりなさい。」と言いました。彼らを攻撃して、彼らと対抗しなさい、または、対話しなさいとも言っていません。多くの人が、ここで何らかの対応をしようとしてしまいます。けれども、悪に対しては遠ざかることが必要です。その理由を次にパウロは書いています。

18 そういう人たちは、私たちの主キリストに仕えないで、自分の欲に仕えているのです。彼らは、なめらかなことば、へつらいのことばをもって純朴な人たちの心をだましているのです。

このような人が、教会の活動に参加しようとするのは、紛れもなく自分たちのところに人を引き寄せたいからです。自分たちの利益が大きくなるために、教会にいる人々を利用しようとしています。そして彼らの特徴は、「なめらかなことば、へつらいのことば」を話すことです。一見、すばらしいク

リスチャンだなあと思わせるようなことを話すのですが、教会の中で仕えるのではなく、自分たちに人を寄せ集めようとするためにそのようなことを行ないます。だから、純朴な人、警戒心を持っていない人たちは、だまされてしまいます。ですから、「遠ざかる」という行為が賢明なのです。

19 あなたがたの従順はすべての人に知られているので、私はあなたがたのことを喜んでいますが。しかし、私は、あなたがたが善にはさとく、悪にはうとくあってほしい、と望んでいます。

ローマにいる聖徒たちに、パウロは、このような人々が教会に入り込んでくるという現実を知ってほしい、というところにありました。主のおことばを借りれば、鳩のようにやさしくあるだけでなく、蛇のようにさとくなってください、と言うことです。自分たちが思いもよらないところで入り込んでくることがよくあるのです。

異端など、教会の人々を自分たちのところに引き寄せようとしている団体の存在を知ることは大切ですが、パウロは同時に、「善にはさとく、悪にはうとくあってほしい」と言っています。悪いものについて、私たちはとかく好奇心を持ってしまいます。けれども、偽りの教え、悪い行ないについて心を留めるのではなく、善にさとくなりなさいとパウロは言っています。人の徳を高めること、基本的な聖書の教え、また基本的なクリスチャンとしての歩み、これらは私たちの知的好奇心を刺激することはありませんが、このようなものにいち早く飛びつくように、とパウロは勧めているのです。

20 平和の神は、すみやかに、あなたがたの足でサタンを踏み砕いてくださいます。どうか、私たちの主イエスの恵みが、あなたがたとともにありますように。

パウロは今、悪にはうとくありなさい、と言ったので、これらの悪を神が根絶してくださる約束を話しています。自分たちに分裂やつまずきを引き起こすような悪は、神が打ち滅ぼして下さり、平和をもたらしてくださいます。「あなたがたの足でサタンを踏み砕いてくださいます。」とありますが、これは、創世記3章15節において、主が蛇に語られたことばです。女の子孫、つまりキリストがおまえの子孫、つまり反キリストの頭を踏みくだいてください。主が地上に来られるとき、私たちも天から主とともに来ます。主イエス・キリストは、反キリストと偽預言者を滅ぼして、火と硫黄の池に投げ込まれます。サタンは、鎖につながれて、底知れぬ所に行きます。そして神の国が立てられて、平和がこの地上を支配するのです。したがって、これら悪については主が必ず滅ぼして下さるから、あなたがたは忍耐しなさいと勧めているのです。

2B 宣教チーム 21-24

今、パウロは祝祷をしました。「どうか、私たちの主イエスの恵みが、あなたがたとともにありますように。」と言っています。けれども、また語り始めます。

21 私の同労者テモテが、あなたがたによろしくと書いています。また私の同国人ルキオとヤソンとソシパテロがよろしくと書いています。

先ほどは、パウロが、ローマにいる聖徒たちにあいさつをしていましたが、今度はパウロのそばにいる人たちが、彼らにあいさつをしています。初めに、テモテがあいさつをしています。パウロは「私の同労者」と書いていますが、他の箇所では「私の子」とも書いています。テモテこそ、パウロのかたわらにずっといた人であり、パウロが考えていることをいち早く理解した人でもあります。

そして「ルキオ」という名前は、使徒行伝 13 章のアンテオケにある教会の指導者の一人として出てきます。預言者あるいは教師だったようです。この二つは同一人物かもしれません。「ヤソン」は、使徒行伝 17 章に出てくる人物です。彼はテサロニケにいて信者となりましたが、彼はパウロたちを自分の家に招いたようです。そのときユダヤ人が暴動を起こして、ヤソンの家を襲い、町の役人のところに引っ張り出して来ました。このような迫害を受けた兄弟が、今、パウロのそばにいます。さらに「ソシパテロ」は、使徒行伝 20 章 4 節に現われるベレヤ人ソパテロと同一人物かもしれません。つまり、ヤソンもソシパテロも、コリントからエルサレムに向かっているパウロとともにいる一行の一人でした。

22 この手紙を筆記した私、テルテオも、主にあつてあなたがたにごあいさつ申し上げます。

口述筆記をしている筆記者があいさつしています。ローマ人への手紙は、他の手紙と同じように、口で話すことばを筆記させることによって、記されています。彼もキリスト者であり、パウロといっしょにいた者の一人でした。

23 私と全教会との家主であるガイオも、あなたがたによろしくと書いています。市の収入役であるエラストと兄弟クワルトもよろしくと書いています。

「ガイオ」の名前は、コリント人への第一の手紙 1 章に現れます。パウロは、クリスポとガイオのほか、バプテスマをさずけたことがない、と書いています。このガイオの家にパウロは泊まっていたようです。全教会の家主と言っていますから、いくつかある家を教会のために開放していたのかもしれません。また、使徒行伝にも、エペソにおいてガイオという名前の人物がパウロの一行として登場します。そして、「エラスト」はコリントの市の収入役です。彼の名前は、今でもコリントの遺跡に記されているのを見ることができます。彼は使徒行伝 19 章 22 節とテモテへの第二の手紙 4 章 20 節にも、パウロの一行の一人として登場します。ガイオもエラストも比較的裕福な人でありながら、自分の財産を主のためにささげてパウロと旅をした人々でありました。

このように、パウロは、一人で宣教旅行を行なったのではなく、チームで行ないました。彼を助け

てくれる人が周りにいたので、使徒行伝で見ることのできる働きを行なうことができたのです。私たちの宣教は、一人で行なうのではなく、このようにチームで行なうものです。

そして、24 節がありませんが、新改訳には下の欄の脚注に記されています。「私たちの主イエス・キリストの恵みがあなたがたとともにありますように。」パウロは、主イエス・キリストの恵みによって何回も手紙を締めくくろうとしています。これが私たちクリスチャンの基本の基本であり、主イエス・キリストの恵みを知り、そこにとどまりつづけることがクリスチャン生活のすべてです。

3B 祝祷 25-27

けれども最後に、パウロは長い頌栄をしています。祈っているのですが、そのなかで神をほめたたえています。

25-27 私の福音とイエス・キリストの宣教によって、すなわち、世々にわたって長い間隠されていたが、今や現わされて、永遠の神の命令に従い、預言者たちの書によって、信仰の従順に導くためにあらゆる国の人々に知らされた奥義の啓示によって、あなたがたを堅く立たせることができる方、知恵に富む唯一の神に、イエス・キリストによって、御栄えがとこしえまでありますように。アーメン。

パウロは、まず、「私の福音とイエス・キリストの宣教」と言っています。主がパウロに啓示してくださった真理を、パウロは人々に宣べ伝えました。そして、この福音は、「奥義の啓示」であると言っています。奥義とは、パウロがここで言っているように「世々に渡って長い間隠されていたけれども、今、現われされた」ものです。それは、「永遠の神の命令」です。世々に渡って立てておられるご計画であり、その命令にパウロは従っていました。そして、預言者たちは、神の命令に従って、将来に起こることについて語りました。預言者たち自身も、その意味するところは理解することができなかったのですが、とにかく、語りなさいと主が命じられたことを語ったのです。

何をもって奥義なのかと言いますと、「信仰の従順に導くためにあらゆる国の人々に知らされた」真理でした。律法の行ないではなく、信仰によって義と認められること。そして、ユダヤ人だけではなく異邦人もその救いにあずかることができること。これらは、預言者たちによって語られていました。けれども、理解できなかったのです。今、このパウロに主がこの真理を悟らせてくださり、それゆえパウロは、福音をくまなく世界中に宣べ伝えました。

そしてパウロは、この奥義の啓示によって、「あなたがたが堅く立つことができる」と言っています。ふりまわされるのではなく、堅く立つことができるような真理、それが福音です。花はしぼみ、草はかれるが、主のみことばは永遠に残るとあります。私たちも、この滅びゆく世界の中に生きていて、揺らぐことなく生きることができます。

そして最後にパウロは、「知恵に富む唯一の神に、イエス・キリストによって御栄えがありますように。アーメン。」と言っています。この奥義は実に知恵に富んでいます。パウロも、イスラエルの選びと、異邦人への神のあわれみについて語っているとき、神の知恵と知識は、なんと富んでいることなのでしょうか、と言いました。福音は、このように神の知恵と知識が満ち満ちているメッセージなのです。そして、頌栄をしています。主に栄光をお返ししています。

これでローマ人への手紙が終わります。そして今日は、主にある兄弟姉妹、という題でした。私たちはこのように聖書の学びをしていますが、この学びだけではクリスチャン生活は片手落ちであります。パウロがこの手紙を書けたのは、主にあつてともに労する兄弟姉妹たちがいたからです。ともに労苦する中において、私たちは初めて兄弟愛を知ることができ、そして、互いに本当の意味であいさつを交わすことができます。